

第 47 回 研究員集会の開催にあたって

今後の大学教育を考えるー文理融合型教育への期待と課題ー

グローバル化、AI 化、人生 100 年時代、予測困難さ、といった特徴を持った複雑な社会状況は、学校教育のこれまでの在り方を見直す契機となっている。特に近年では、デジタル革新をきっかけにして、「狩猟社会 (Society 1.0)」「農耕社会 (Society 2.0)」「工業社会 (Society 3.0)」「情報社会 (Society 4.0)」に続くべき新たな社会「Society 5.0」への変革のときを迎えようとしているとして、具体的な社会像やアクションプランが提案されている。

例えば、日本経済団体連合会 (2018) では、「誰もが AI を活用し、自らの想像力・創造力を発揮することが求められる Society 5.0 において、文系・理系間の垣根は本質的に意味がなく、高校での進路選択により文理が断絶されるのは深刻な問題である。文理分断から脱却して、全ての大学生に基礎的な AI・情報科学・数学・生命科学等を必修化し、文系を専攻する者も理数の知識を身につけ、理系を専攻する者も人文・社会科学や芸術・デザインなどの領域を学ぶなど、文理を隔てずリベラルアーツを学ばせる必要がある」と提言されている。

そのような学習の在り方に対応する方途の 1 つとして、文理融合型のカリキュラムを導入することで、学生が現実社会に存在する課題に対し、柔軟な発想力と豊かな専門知識をもって解決に臨めるようになることが期待されている。

文理融合とは、「文系・理系」という学問的区分にとらわれず、領域横断的な知識力と発想力を学生に習得させようとする教育方針のことである。私立大学をはじめとして、近年では、国立大学においても、文理融合を重視した学部の新設、カリキュラムの刷新に乗り出している。

しかしながら、これまでも教養教育の改革によって文理融合的な教育改革が施行されてきたし、たとえ文理融合を重視した学部を設置したところで、建物全体としては<文理融合状態>でも、フロアやスペースは完全に専門学部に分かれているのが実態で、卒業研究において、<文理融合型研究>をしている学生は少ないのではないかと危惧される点が残されている。元日本学術会議副会長の吉田民人も(2003)、「文理融合の方法論は、…(略)… 従来の科学論の理系科学と文系科学の定義に依拠する限り、両者のかかわり方を客観的に説明しうるかたちでの文理の融合はありえないのではなかろうか」と指摘しながらも、「この問題を解決する要諦は、「統合システムの科学」を学術の形として認知すること、そして、特定の課題にかかる固有のひろがり領域の「統合システムの科学」が文系と理系にわたる多くの個別領域学の糾合で成り立つものであるとの合意を形成することにある」と述べている。

本研究員集会では、学問ではなぜ文系と理系が区分されるようになったのか、近年、大学の現場でなぜ文理融合に関心が持たれるようになったのか、文理融合によって大学教育がどのように変化しようとしているのか、文理融合を実質化するためにはどのような課題があるのか、など、文理融合型教育を取り巻く様々な課題を取り上げ、参加者と共に検討していきたい。

2019 年 9 月

広島大学高等教育研究開発センター